第Ⅲ部　〈核〉と人類――原子力イメージの転換

人権優先の「世界共和国」へ

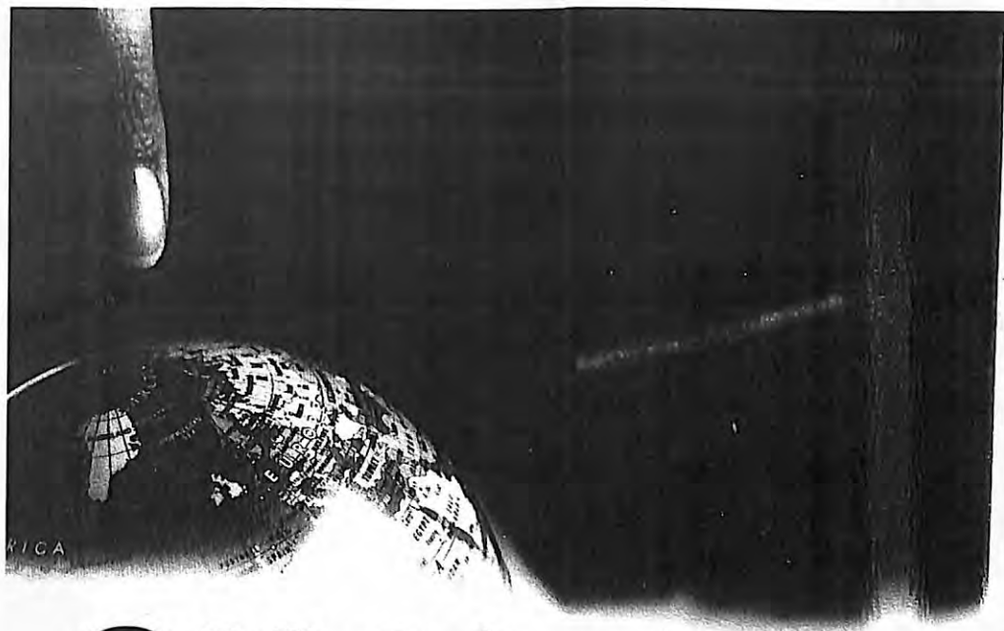
加藤哲郎

二〇世紀は原子力の世紀だった。二一世紀が「核」なき社会になるかどうかは、世界的な核軍縮・廃絶と脱原発の程度で測られる。

H・G・ウェルズの警告

いまから一〇〇年以上前の一九一三年に、「原子爆弾」「原子エネルギー」がSF（サイエンス・フィクション）として生まれた。命名者はイギリスの作家H・G・ウェルズ。生物学者で、ウェッブ夫妻のフェビアン協会に拠る漸進社会主義者でもあった。すでに『透明人間』『宇宙戦争』などで知られていたが、第一次世界大戦前夜に『解放された世界』を書き、核兵器と核エネルギーを登場させた。

『解放された世界』では、原爆の前に産業利用がある。原子力発電・エンジンで世界の富は飛躍的に拡大するが、他方で石炭・石油等による旧式産業を壊滅させ、大量失業と貧富の格差を生む。大国間開発競争から世界戦争になり、原爆が使われる。絶滅兵器の出現でようやく人類はめざめ、科学技術を管理する「世界共和国」をつくる。つまり原子力産業利用→世界格差社会→原子戦争→世界共和国という恒久平和の物語だった。原爆の廃虚には長期の放射能汚染も描かれた。翌一九一四年、現実の世界大戦が始まっ



2100年へのパラダイム・シフト

日本の代表的知性50人が、世界/日本の大変動を見通す

広井良典＋大井浩一 編

（作品社，2017.3）

広井良典＋大井浩一 編

代表的知性50人 21世紀を予測！

本を代表する50人の知性が
21世紀の歴史”の
大転換を
測する

資本主義の危機、ポピュリズムの台頭、
宗教とテロ、新格差社会の到来……

た。

ウェルズに示唆を受け原子爆弾を実現させたのが、ユダヤ系ハンガリー人物理学者レオ・シラードだった。シラードは『解放された世界』を読み「現在の物理学上の諸発見の工業的応用に関する限りは、作家の予見が科学者の予見より正確である」と述べ、一九三三年に核連鎖反応を理論化した。ナチスの政権掌握でドイツから亡命し、ヒトラーから文明を守るため、第二次大戦開始時にアインシュタインを通じてルーズベルト大統領に原爆製造を提案。米英政府によるマンハッタン計画、広島・長崎への原爆投下を導く。シラード自身はドイツ敗戦後の日本への原爆使用に反対したが、すでに巨大な軍産学システムになった核開発を止められなかった。同じ頃、ウェルズは、国際連盟から国際連合へという「人権宣言」の普遍化に期待をかけた。しかし、核技術と核兵器を軍事利用として独占したアメリカは、トルーマンの原爆投下声明で産業利用の可能性を示唆。核は軍事的抑止力と産業エネルギーとして冷戦下「平時利用」に突入した。

SFの警告に応えるために

日本にもウェルズは早くから紹介されていた。一九二〇年、雑誌『新青年』の岩下孤舟「世界の最大秘密」では、アメリカまで放射線を飛ばす原爆の威力と、貧困解消・家庭電化の「原子的家庭」が夢見られた。原爆による戦局「一発逆転」は、一九四五年一月八日『朝日新聞』の湯川秀樹「科学者新春の夢」などで語られた。「原子的家庭」の方は、終戦直後の「科学技術立国」、仁科芳雄・武谷三男ら「専門家」の「平和利用」解説に受け継がれた。それが占領期に「風邪にピカドン」の家庭常備薬や「鉄腕アトム」に化身し、一九五四年以降の原発導入、高度経済成長の前提となる。ビキニ被爆以後は「原水爆反対、だからこそ平和利用」のスタンスで、地震列島に原発が林立しフクシマの悲劇を迎えた。

しかし日本にもウェルズの「世界共和国」「人権宣言」を受け、核に反対する論理が戦前から生まれていた。日本SFの草分け海野十三は、一九二七年の短編「放送された遺言」で、核開発は神への冒瀆（ぼうとく）ではないか、巨大エネルギーを安全に統御する力は人類にあるかと問題提起した。「ヒバクシャ」森瀧市郎や後に原子力資料情報室代表になる「専門家」高木仁三郎らが「核と人類が共存できない」と気づくのは七〇年代、沖縄核密約と福島原発稼働の時期であった。

「核」なき社会とは、ウェルズ風にいえば核兵器も原発も必要としない人権・生存権本位の世界秩序である。SFの警告に応えるためには、ウラン採掘から廃炉作業まで被曝労働をなくすこと、巨大リスクの産学官システムと化した製造装置の解体、膨大に蓄積された放射性廃棄物処理が必要とされる。核廃絶と脱原発は「世界共和国」への長くて困難な道である。ヒロシマからビキニを経てフクシマを体験した被爆・被曝国日本は、「未来世代への暴力」を断ちきり、人権優先社会、自然との共存可能性を示さねばならない。

加藤哲郎（かとう・てつろう）
一九四七年生まれ。一橋大学名誉教授。専攻：政治学。著書に『情報戦と現代史――日本国憲法へのもうひとつの道』（花伝社）、『日本の社会主義――原爆反対・原発推進の論理』（岩波現代全書）ほか。